

Title	吐魯番出土文物研究会会報 第102号
Author(s)	
Citation	吐魯番出土文物研究会会報. 102 p.1-p.6
Issue Date	1994-11-01
oaire:version	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/78913
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

吐魯番出土文物研究会会報

第102号

1994年11月1日
吐魯番出土文物研究会

■ 目 次 ■

第6回吐魯番出土文物研究会大会の記録 1

第6回吐魯番出土文物研究会大会の記録

※ 活 動 報 告

第 6 回 大 会

期 間：1994年8月28日（日）～30日（火）／2泊3日

会 場：興正会館・龍谷大学文学部（京都市下京区）

参加者：浅田かおり（早稲田大学学生）

荒川 正晴（早稲田大学第二文学部）

片山 章雄（東海大学文学部）

白須 淨眞（広島県立廿日市西高等学校）

關尾 史郎（新潟大学人文学部）

竹内 智子（中央大学大学院生）

北條 祐英（東海大学研修員）

町田 隆吉（東京学芸大学附属高等学校）

山口 洋（中央大学大学院生）

* 本年は上記のように、5人の会員以外にも、4人の非会員の方が全日程を通じて参加され、これ以外にも、伊藤敏雄（大阪教育大学教育学部）、井上徳子（京都大学大学院生）、および大澤孝（大阪外国語大学外国語学部）の3氏が一部日程に参加されました。また大会の開催にあたっては、龍谷大学文学部の小田義久先生と北村高氏に会場の提供や準備その他でご高配を賜りました。この誌面を借りて御礼申し上げます。

※ 発 表 要 旨

■山口 洋「吐魯番出土文書中の高昌郡関係文書」

本発表は、高昌郡関係の出土文書が、河西政権研究において史料としてどのように利用できるかを検討した、その途中経過報告である。高昌郡の始まりは、前涼の第4代張駿による咸和2（327）年の郡設置である。この郡設置は、前涼が高昌を領域内の一郡としてその郡県体制下に組み入れたことを

意味する。以後、高昌郡は河西を勢力下に収めた前秦・後涼・西涼・北涼の初政權に受け継がれ、北涼が439年に北魏に滅ぼされると、その残党沮渠無諱・安周が高昌に北涼の亡命政權を建てるに及び、河西政權による高昌郡経営は終わった。問題の高昌郡関係文書とは、高昌郡が設置されていた時期に、高昌郡において作成されたと見られる文書である。これらの文書は、河西政權における地方行政の一斑を表わす史料であり、編纂史料のみでは情報不足である河西政權研究において、貴重な情報を提供している。そこで、この文書がどのような価値を有するか、それを明確にする基礎作業を行なった。

まず現時点において利用できる史料は、『吐魯番出土文書』第1冊（釈文本・写真本）収録の高昌郡関係文書である。また『文物』1983年第1期所収の「吐魯番出土十六国時代の文書－吐魯番阿斯塔那382号墓清理簡報－」に収録・紹介された文書（『吐魯番出土文書』第1冊未収録）のうち、数点は図録『吐魯番博物館』にカラー写真が収録されており、以上の各図版をもとに基礎調査を進めることが可能になった。ところで高昌郡関係文書を概観すると、その推定制作年代は前涼から前秦・西涼・北涼と各時代に広がっているが、後涼時代のものは見受けられない。これは、吐魯番出土文書の全体数に対して、高昌郡関係文書は少数であり、後涼時代の文書が単に出土していないだけとも考えられる。また、高昌郡関係文書は総点数約200点強であるが、そのうち紀年のある文書が32点（前涼2点、前秦1点、西涼6点、北涼23点〈建平1点・承平1点・義熙1点など、哈拉和卓99号墓と同88号墓出土のものは、白須淨眞氏の説に従って麴氏高昌国時代とみる〉）あり、北涼時代の出土文書の点数が多い。そこでまず北涼時代の文書について調査した。『吐魯番出土文書』写真本に収録された北涼時代の文書は、紀年を有するものが23点あり、北涼時代に比定される墓から出土した文書の総数は147点であった。そのうち文書の断片が小さいため、文書の種類不確定なものを除き、残りを狭義の意味でいう文書（発給者と受給者が明記され、その文書がなんらかの効力を発揮するものであること、またそういう文書であることが推測できる断片）と記録（戸籍・計帳など）に分け、さらに狭義の意味でいう文書を私文書（民間の契約書など）と公文書（すなわち官文書）とに分類した。この結果、官文書である兵曹関係の文書が比較的まとまっていることが確認できた。またこれらの文書は、北涼政權下における高昌郡の文書行政システムを反映したものであることから、編纂史料のみでは明らかにしえなかった北涼政權の地方行政組織や制度の解明に利用できることが期待される。そのために文書史料に対する基礎的な研究を行なうことがまず第一であると考えた。高昌郡の行政制度に関する先行研究には、唐長孺氏の「吐魯番文書中所見高昌郡行政制度」（同氏『山居存稿』、所収）があり、『吐魯番出土文書』第1冊所収の文書を用いて考察しており有益であるが、必ずしも満足できない点もある。そこで唐氏の研究を踏まえて、さらに唐氏が利用しなかった史料（『吐魯番出土文書』第1冊所収の他の文書、未収録の文書など）を検討材料に加えて考察中であり、現在以下の点が明らかである。

まず文書に記された官職名を整理すると、第一に北涼政權下の郡には郡の官吏と府の官吏が併存したことがわかる。果たして、これらが整然と区別されていたのか、混在していたのかは不明である。これは五胡十六国時代の郡太守が將軍号を持っていたため（郡太守の將軍号を帯びる風潮は、『通典』卷33職官15郡太守の条に「晉郡守皆加將軍、無者爲恥」とある）、その將軍府としての府吏が存在したと見られる。またそういった風潮が河西政權にも行なわれていたことも指摘できる。さらに文書から見出された官職名のうち、編纂資料上に見出されない官職名が存在する。「典軍」の名称は、三国時代の史料に若干見出されるものの、『晉書』百官表には見られない。しかし文書では、軍事関係のものに「典軍主簿」・「典軍」と官職名と署名があるので、軍事関係の官であろう。「校曹」の名称は、「校曹主簿」・「校曹史」という官職名と署名のある文書が軍事関係のものであることが

ら、軍事関係の官という可能性もあるが、断定するにはやや疑問が残る。また「酒吏」・「蔵吏」・「内蔵吏」なども不明であるが、その名称から職務内容をある程度推測できないこともない。しかし「外軍」については、軍事関係の官職名と見るべきなのか、それとも軍の編成と見るべきなのか、疑問である（文書には、「外軍某」と記されている）。このように文書に記されていた官職名は、ある程度までは編纂史料で確認された官職名と一致するが、一方不明のものも決して少なくない。今後は問題点を解決するために、まず文書そのものの作成過程を追求して、そこに関与した官吏がどのように文書作成に関わったか、そしてその文書の作成目的はいかなるものであるかを解明することが必要である。

■ 荒川 正晴

「唐代コータン地域の ulaγ について－マザル＝ターク出土、ulaγ 関係文書の分析を中心にして－」

報告者は、本発表において、マザル＝タークより出土した「唐年次未詳（8世紀）于闐新市烏駱馬帳」（Or.8212/1551 or 1552 or 1553）を取り上げ、その分析を通じて、唐代コータン地域で施行されていた烏駱（ulaγ）の実態を考えてみた。本文書は、現段階では写真が公表されていないが、録文については、郭鋒氏が既に発表されており（同氏『斯坦因第三次中亞探險所獲甘肅新疆出土漢文文書－未經馬斯伯樂刊布的部分』蘭州 甘肅人民出版社、1993年、49頁）、さらに森安孝夫氏も文書を調査された上で、独自に録文を作成されている。両氏の移録には、行数の相違や字句の異同が認められるが、本発表では、森安氏作成のものに依拠して検討を行なった。

まず本文書の年代については、これがマザル＝ターク遺址から出土した漢文文書であるという点から、唐の支配のもとにマザル＝タークに神山堡が配置されていた時代、それも8世紀の開元・天寶時期～建中・貞元時期に属するものであることが推定される。またその形態や型式からは、本文書が唐の「式に准じ」て作成された正式な「新市烏駱馬」の帳簿であることが知られ、そこには「新市烏駱馬」が一足ずつ、一定の書式のもとに登載されている。

次に内容を検討してみると、「新市烏駱馬」の「新市」とは、「烏駱」を新たに買い上げる意味ではなく、その実態は、官側で使者を送る使馬が必要となった段階で、新たにマザル＝ターク（神山）オアシスにいる民に「烏駱」馬を供出させ、それに対する報酬額を算出することをもって「新市」と表現していたことが考えられる。また報酬額を見ると（4,000、3,000、2,800文）、それはほぼ当時の馬の売買価格に相当していたと推測され、報酬額としてはかなりの高額となっている。従って、本帳簿に「支付」・「酬」と記されていても、必ずしも実際に銭が支出されていたとは限らず、その銭額に準じて徭役が減免されていた可能性が高いものと認められる。

既に検討したように、「烏駱」は古トルコ語である ulaγ を漢字音写したものであり、トゥルファン文書に見えるところでは、唐の公的な交通官馬（長行馬）や軍馬などとは異なり、唐の羈縻支配下にあった遊牧民に供出を課した馬となっていた。本文書の存在から、羈縻支配下にあったトルコ系の遊牧民だけでなく、コータンのようなオアシス地域にあっても、ulaγ は羈縻州府の民に供出する義務が課せられ、しかもそれに対して見返りが用意されていたことが知られる。つまり唐は、長行馬などのような常設の官馬とは別に、羈縻支配地域では共通して、「烏駱」の名目で馬驢を供出させていたと考えられるのである。

しかしながら、このことは唐の支配によって初めて「烏駱」という語がコータン地域にもたらされたことを必ずしも意味していない。というのも、唐の支配以前に既にトルコ系遊牧国家である西突厥によって、ulaγ の供出義務が課せられていた可能性を考えるべきであるからである。つまり中央アジア地域では、唐の支配以前から、漢人のオアシス国家であろうが、イラン系のオアシス国家であ

うが、ulaγという語は民間レベルにはともかく、その支配層には定着していたと見ることができる。

とするならば、唐は使馬としての馬驢の供出を羈縻支配地域に置かれた遊牧民・オアシス民双方に課す際に、その支配以前において、ulaγと呼ばれた蓄獣の供出が中央アジアで広汎に施行されていた状況に基づいて、ともに「烏駱」という語を採用したものと考えられるのである。

■片山 章雄「高昌吉利錢について」

0. はじめに

主に吐魯番地域から発見されている高昌吉利錢の、鑄造や流布の時期など基本的な問題点については、現物例・確認総数が遺憾ながら多くはないという状況が関係していると考えられる。これまであまり言及されなかった著録や現物の情報も若干得たので、それらも含めて紹介し、基礎的な整理を試みることにした。今回の紹介・整理にあたっては、Ⅰ 確認できる最初が個人蔵で後の行方が不明のもの、Ⅱ 探検隊・調査隊による入手で後に機関蔵になったもの、Ⅲ 個人蔵から機関蔵になったもの、Ⅳ 所蔵不明ながら確かな写真などから存在を確認できるもの、というように4つに分類し、具体的には①～⑩の、のべ18個に言及し、拓本だけのものは割愛した。ただし、ⅠからⅢ・Ⅳに含まれるように移動したものもありうるし、Ⅳの写真には、Ⅰ・Ⅱ・Ⅲのうち写真が未公表と考えられていたそのものの写真が含まれている可能性もある。

1. 19世紀までの高昌吉利錢

宋代の金光襲『泉宝録』は「高昌錢」を著録したらしいが散逸、1149年序の洪遵『泉志』には「高昌国錢」とあるが『周書』高昌伝の引用で（清の金邦『（洪氏）泉志校誤』併照）実見していない。清の翁樹培は19世紀初めのことか、『古錢彙考』を著して言及したらしいが未刊。1826年序の張崇懿『錢志新編』ではおそらく初めて錢文を「高昌吉利」とし、円形方孔の型式図に錢文を正しく入れた（ただし楷書）。上記『古錢彙考』を後に劉燕庭が校訂（19世紀半ば前後か）、1936年刊『古錢大辞典』の校訂稿本の引用によれば、校訂者劉が「高昌吉利」1枚を所有したという。さらに1863年の王錫榮『泉貨彙攷』ではおそらく初めて高昌吉利錢の拓本が掲載され、翌年、李佐賢『古泉匯』利集では「高昌吉利」「銅錢」が著録されたのである。しかし、この時点までに存在が確認できるのは、1枚（劉燕庭蔵）かそれ以上ということになり、結局Ⅰ－①として1枚を数えられるに過ぎない。

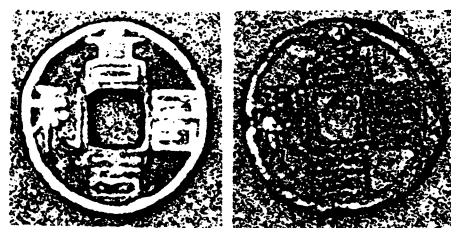
2. 今世紀の発見品と著録

今世紀になって探検隊・調査隊などにより購入・発掘されたものを中心に紹介・整理すると、1908?～1914?年、大谷探検隊による4点（龍谷大学図書館蔵1点、旅順博物館蔵3点）＝Ⅱ－②～⑤、1924年前後、大連・富田孝四郎蔵のもの（拓本出品『貨幣』第61号）＝Ⅰ－⑥、1928～30年、黄文弼購入（『高昌』、『吐魯番考古記』）＝Ⅱ－⑦、1930年代、黄葉、劉辦蔵のもの（『古錢大辞典』下編、303葉表に記事）＝Ⅰ－⑧・⑨、1940年代、包申甫蔵の2点（『泉幣』第17期）。ただしこれは現在上海の中国錢幣館に陳列されている2点と推測されるので、Ⅲ－⑩・⑪となる。（1920年代?～）1940年代～、田中啓文蔵～現日本銀行貨幣博物館蔵の2点（図版参照）＝Ⅲ－⑫・⑬、1970年、西安何家村発見（『文物』1972年第1期）、現陝西歴史博物館陳列の1点＝Ⅱ－⑭、1973TAM519出土（642年の墓志も併出、『文物』1975年第7期）で現新疆維吾爾自治区博物館蔵のもの＝Ⅱ－⑮、などがあり、鮮明なカラー写真があるものの現蔵が不明な、図録『新疆錢幣』所載 074,075,076の3点は、Ⅳ－⑯～⑰ということになる。

3. まとめと残された問題

以上から、現時点で私が確認できる総数はⅡ・Ⅲの計12枚

か、それに若干枚を加えた数となる。今後19世紀までの錢幣学の著作から新たに数えるべきものが出現すれば、それはどこからのものかにもよるが、吐魯番の本格的発掘以前のものということになり、流布その他の根本的問題にも深刻に関係してくると考えられる。報告に際しては、《附表》において判明する限りの直径・厚さ・重量の数値を示し、再整理した。



⑫・⑬、直径2.5~2.7㎜（許可を得て撮影）

■町田 隆吉

「6～8世紀のトゥルファン盆地の農業生産—トゥルファン出土文書からみた農業生産の一側面—」

6～8世紀のトゥルファン盆地の農業生産（オアシス農業）がどのように営まれていたかという点について、『魏書』高昌伝などの文献史料がつづけている内容はわずかである。また発掘された考古遺物に含まれる穀物などの種子類も少なくないが、これらからこの地の農業生産の実態を明らかにすることはむづかしい。そこで、近年整理・刊行が進んでいるトゥルファン出土文書を利用して、農業生産のうち穀物生産に限って具体的な農作業の時期を中心とする基礎作業を試みることにしたい。

その際、基礎史料としてとりあげたのが、麹氏高昌国末期の寺院経済文書の一つ「高昌乙酉・丙戌歳某寺條列月用斛斗帳歴」（『吐魯番出土文書』第3冊、所収）である。これによれば、2月に麦の播種、5月に麦の収穫、6月に「秋」の播種、7月に床畑の除草という農作業をみてとることができる。このうち麦が大麦であるか小麦であるか、「秋」が何をさすかなど問題がある。これを検討するため、租佃後払い方式の租佃契及び債務後払い方式の挙麦契などを分析したところ、大麦の収穫時期は5～6月、小麦は6～7月であることがわかり、「帳歴」の麦は大麦であることが明らかになった。また「秋」については、租佃契にも「麦・秋」「秋・麦」など「麦」字と連ねて使われる例が散見する。「秋」の意味を考えるにあたって「唐大曆6（771）年某（馬）寺田園出租及租糧破用帳」（『文書』第10冊、所収）の「單秋」（秋収穫の一毛作と理解）の租として「粟」もしくは「床」があげられていることから、「秋」を「粟」もしくは「床」のいずれかをさす（但しどちらでもよい）と理解した。したがって、一年二毛作の場合、5月の大麦収穫後、6月に「秋」、すなわち粟か床かの播種が行なわれ、10月に収穫していることが明らかになった。なお小麦の場合には、収穫時期が6～7月となるため、その後に粟または床の作付けは行なわれなかったと推測する。

このほか、ここで言及しえなかった果樹栽培や野菜栽培を含む農業経営全般、もう少し具体的にいえば、労働力編成や灌漑・施肥などの問題については他日を期したい。

■白須 淨眞

「大谷探險隊に関する新たな資料の紹介—上原芳太郎の記録資料と上原が整理を試みた一群の資料について—」

- I 大谷探險隊とその報告
- II 『新西域記』を編集した上原芳太郎という人

【上原芳太郎の記録資料】

III 上原芳太郎の『外遊記稿』6冊について

1984（明治27）年以降、11年間の上原芳太郎の海外調査活動の未公開の記録
龍谷大学大宮図書館所蔵

『外遊記稿』1（「韓国・濠洲」） 「韓国小記」、「海南飛鴻」を収録

『外遊記稿』2（「蘭領印度」） 「蘭領印度」を収録

『外遊記稿』3（「清国・星架坡・欧米・北京」）

「南船北馬」、「酷暑酷寒」、「欧米記勝」、「小燕京記」を収録

『外遊記稿』4（「印度」） 「聖蹟探古」を収録

『外遊記稿』5（「韓国」） 「鷄林遊記」を収録

『外遊記稿』6（「満漢・石経山・北京」）

「満漢紀行」、「苾題記遊」、「燕京日記」を収録

〔録文〕

「酷暑酷寒」（『外遊記稿』3冊所収）、拙稿「上原芳太郎の『外遊記稿』について」（『小田義久先生頌寿記念東洋史論叢』、1995年刊行予定）の付編として収録

「南船北馬」（『外遊記稿』3冊所収）、拙稿「上原芳太郎の『外遊記稿』所収の「南船北馬」－その解説と録文－」（『龍谷史壇』第103・104号、1994年）

〔明治旅行日記としての『外遊記稿』とその歴史的位置〕

上原の『外遊記稿』は、成島柳北の『航西日乗』に代表される幕末から明治の海外旅行者たちの旅行日記の流れのなかに位置づけられる「明治という時代の海外旅行日記」の一つ

【上原芳太郎が整理を試みた一群の資料】

Ⅳ 上原芳太郎の『新西域記』の編集について

新たな資料群の出現……本願寺史料研究所所蔵

拙稿「『新西域記』未収録史料の出現について－伊藤洞月・足利瑞義・渡辺哲信の上原芳太郎への返信－」（『本願寺史料研究所報』第7・8号、1994年）

Ⅴ 上原芳太郎収集資料（1）

1896（明治29）年、伊藤洞月・足利瑞義・渡辺哲信のアフガニスタン・シベリア経由ウラジオストック行計画

Ⅵ 上原芳太郎収集資料（2）

新たな資料群の出現……本願寺資料研究所所蔵

拙稿「大谷光瑞及び大谷探險隊に関する新資料について－本願寺史料研究所蔵の二十五点の資料とその概要－」（『本願寺史料研究所報』第10号、1994年）

25点の資料は、録文と解説を順次実施していく予定

Ⅶ 大谷光瑞と大谷探險隊をどのように認識するのか－その方法論の模索－

大谷光瑞の最初の外国旅行「清国巡遊」に、まず何を読み取るのか。

光瑞は「蘆漢鐵路」敷設計画ルートを旅行。「蘆漢鐵路」の建設を提唱したのは、張之洞。光瑞と張之洞との関係は重要

大谷探險隊派遣の意志決定に至る複雑なプロセスは、25点の資料の研究によって明らかとなろう。

（以上）

事務局（連絡先） 〒182 東京都調布市国領町5-19-14

荒川正晴方

TEL 0424(81)4633

吐魯番出土文物研究会 (The Research Society for Turfan Relics)